中学校技術・家庭科家庭分野における幼児の観察を用いた保育教育実践の検討

Perspectives of practical methods for the experience in early childhood education and care（ECEC）in junior high school Home Economics education

大　関　さわ子＊　　吉　川　はる奈＊＊
Sawako Ozeki　　Haruna Yoshikawa

【概要】中学校技術・家庭科家庭分野における幼児の観察を用いた保育教育実践として、触れ合い体験学習を行うより前に幼児の観察を用いた授業を行い、中学生が観察の中で何を学んだかを中心に考察した。幼児の観察を行うことの意味として主体的な学習へ学習意欲を高めることや、経験の差を埋めることが期待できること、さらに中学生の「幼児」の捉え方について新たな発見や広がりがあることが示された。具体的には・幼児にも、意思や考えがしっかりとある。・一人の尊重すべき人である。・幼児の持っている力（できることたくさんある）を知ったこと、・自分と比較して、体感として大きさの違いを捉えることができる、など多くを主体的に学ぶことが期待できるとともに、事前事後の授業でそれぞれの内容を生徒間で共有していくことの重要性もうかがわれた。
【キーワード】中学生、幼児の観察、保育学習、家庭科

１．問題と目的

中学校技術・家庭科家庭分野で幼児とのふれ合い体験が必修化されたのは、平成20年度告示の学習指導要領であるが、そこでは、幼児とのふれ合いを通して、幼児への関心を高め、かかわることを工夫し学ぶことをめざしてきた。中学生をとりまく社会の現状として、核家族化、少子化の状況が依然としてみられ、その限られた人的環境の中で子どもが育つことは、社会性が未熟、人とのかかわりが苦手な生徒、人間関係における弱さにつながることが危惧されている。

幼児との触れ合い体験は限られた生徒が授業時間の中で幼児と実際にかかわることで、異年齢の相手とかかわる際に必要となる見方やかかわり方を生徒自身が体験し、それらから今後の人とのかかわり方を工夫できるように学ぶことをめざすので、期待は大きい。

これまで触れ合い体験の効果については、ある程度研究が積み重ねられてきており、中学生、高校生に一定の効果を与えるという報告がある一方、中学生と高校生での効果の違いや、授業の方法の在り方による違いが明確でないこと、また触れ合い体験の事前授業と事後授業の方法について確立されておらず、明確な知見が不足している。また限られた授業時間や学校全体との調整の中で実際に幼児との触れ合い体験をすることが難しい状況や、近隣に保育園、幼稚園がなく実施できないなど同じ方法で実施することが難しいことも課題である。実態にあわせて授業の在り方を工夫する柔軟な対応が求められている。本論で対象とした中学2年の生徒は事前の質問紙で尋ねたところ、自身に乳幼児の年齢のきょうだいがいると回答したのは5%、いないのは95%と答えており、乳幼児という年の離れた子どもとのかかわりは日常的に少ない実態がある。日常的に幼児と接しているのは少ない状況で、もし実際に幼児に接したときにどんな気持ちになりますかと幼児に対するイメージを尋ねたところ、「かわいい」、「いやされる」など前向きだが抽象的な表現が67%と多かった。一方、「かわいいと思うけれど疲れることもありそう」、「楽しいけれど、幼児のペースに合わせることもあって疲れるかな」、などいいことも大変なこともありそうだと具体的な回答をした生徒は17%と少なかった。中学生とは心身ともに大きく異なる幼児を相手にどのようにかかわったらよいのかについては具体的なイメージはもちにくく、学習の機会の必要性がうかがわれる状況である。

本論では、異世代と関わる際に必要となる幼児理解をめざして、触れ合い体験学習を行うより前に、幼児の観察を用いた授業を行った。中学生が観察の中で何を学んだかを中心に考察する。

２．方法

（１）調査対象：大学教育学部附属中学校２学年の技術・家庭科（家庭分野）幼児の生活と家族の部分で行った。中学校の近隣にある附属幼稚園に中学生が２クラスずつ出向き、3グループに分かれて、３つの保育室内の幼児の観察を行った。事前に班分けをし、観察する年齢

＊　教育学部附属中学校教諭
＊＊　教育学部生活創造講座

クラスの順番を決めておき混乱のないよう実施した。3歳児、4歳児、5歳児クラスのいずれの様子も観察できるように実施した。

（２）授業の内容

授業日：2018年２月Ｘ日：附属中学校校舎より中学生が徒歩で附属幼稚園に向かい、園内の幼児の保育中の様子をクラスに分かれて観察した。廊下沿いに３つのクラスが並んでいるので、廊下沿いに観察するクラスを変えることができた。なお保育中の流れを壊さないように、留意しながら行った。事前に附属幼稚園園長はじめ管理職に相談をし、手続きもふくめアドバイスと協力をいただいた。附属中学校への引率には技術科分野の教員や共同研究者の大学教員と大学院生の協力をえた。当日の保育の流れに影響をできるだけ与えないように中学生が観察する場所や方法について留意した。

（３）授業の流れの実際

時間	生徒の活動の流れ（2月Ｘ日３・４校時）
10：40	○集合・整列・点呼【場所：生徒玄関前】
	○あいさつ ○教師からの諸連絡を聞く。 【持ち物】筆記用具、クリップボード ワークシート、上履き
10：45	○附属中出発 徒歩で附属幼稚園へ向かう。 ※男女各１列（背の順）
11：05	○附属幼稚園到着 ○整列・点呼【場所：自然観察園】
11：10	○あいさつ ○園長先生のご挨拶を聞く。 ○諸連絡を聞く。
11：15	○幼児同士、幼児と先生の関わり方を中心に観察し、気付いたことをメモする。 （中、外両方から） 外靴は、邪魔にならないところに各自置く。
11：55	○集合・整列・点呼【場所：自然観察園】 ○お礼のあいさつ ○諸連絡を聞く。
12：00	○附属幼稚園出発 徒歩で附属中学校へ向かう。 ※男女各１列（背の順）
12：20	○附属中学校到着 ○整列・点呼【場所：生徒玄関前】 ○振り返りをする。
12：30	○あいさつ

図１　当日の生徒の活動の流れ

当日の授業の流れを生徒の活動を主に図１に示した。また事前授業で以下図２のワークシートを用い、生徒が幼児のイメージを記載し、観察の着目ポイントにすることを自分で記載した。生徒は自分の記載した着目ポイントに沿って、観察を行った。

幼児の生活と家族ワークシート

１．　はじめに幼児についてどんなイメージを持っていますか？

幼児

２．附属幼稚園に行き、どんなところに着目して観察したいですか？

	着目のポイント	当日のメモ
①		
②		
③		
④		
⑤		
⑥		

図２　使用したワークシート

表１　観察を振り返り各自が記載した内容

振り返りで記載された内容

分類名	記述例	学びの変化
幼児の年齢差	・年齢によって違う。 ・年齢によって、話し方、遊びの内容が違う。 ・年齢で遊びが違う、姿も違う。	新たな気づき
幼児の能力	・幼児をひとくくりに考えていたが違っていた。みんな違うので違いに合わせて接することを考えたい。 ・けっこうちゃんとして大人っぽかった。生活習慣が身についていた。 ・子ども同士で「これはここ」「あっちがいいのでは」など、先生の指示なしで共同作業、自分で考えていた。	
子どもの視点	・適切な接し方としては、一緒に喜ぶなど、子どもの視点から見ることをしていきたい。 ・関わるときには自分が思っているより大きくリアクションし、生活を合わせてあげることが大切だと思った。 ・何で笑っているか、怒っているかをもっと知りたいと思った。 ・子どもの気持ちの表現についてもう少し学習したい。 ・私たちと幼児とどちらもが快いかかわり方を考えていきたい。	視点の広がり
先生の働きかけ	・先生は年齢に合わせた対応をしていて適切なかかわり方の参考にしたい。 ・5 歳には小学生になる準備のようで、先生は 1 日をふりかえらせ、積極的に発言させる環境をつくっていた。 ・先生の何気ない行動などたくさん気づくことがあった。	
特徴の明確化	・3 歳は友達と一緒を楽しんでいたが 4 歳は自分の特技を披露してくれる子が多かった。1 年で自己アピールを身につけているんだ。 ・3 歳から 4 歳にかけて片付けの効率が良くなること、3 歳から 5 歳にかけて感情表現が豊かになった。 ・3 ～ 4 歳はひとりでいることが多いが、5 歳は協力しあっていた。 ・楽しいとき、喜ぶときに特徴があって、ジャンプしたり何でも表現する。 ・会話の中心は難しいことは言っていないけれど、相手の目を見て話すなどコミュニケーションを上手にとっていると思った。 ・初対面の私たちに対する反応が見ているだけ、声をかける、数えるなど違っていた。 ・5 歳のクラスにはリーダーがいた。3 歳、4 歳はわいわいしていた。	知識の深まり

各自が幼稚園で観察したいポイントを事前に決めて記述した。中学生自身が幼児の姿や遊びを予想したうえで、観察当日を迎えられるようにした。

観察終了後、後日、振り返りの授業を行った。
グループごとに各自が記述してきたワークシートの観察メモの内容をもとに付箋紙に転記し示しながら、話合いを行った。各グループで、個人が観察した内容をグループで共有し、それを記入した付箋紙を用いてマップを作成して、順に発表した。
写真は各グループが付箋紙を記入し、それをもとに話あいながら、マップを作成しているところである。

（４）分析資料

事前の授業、事後授業時の生徒のワークシートの記述、観察時の記録、事後授業のグループでの付箋紙への記載、発表資料を分析資料としてもちいた。

３．結果

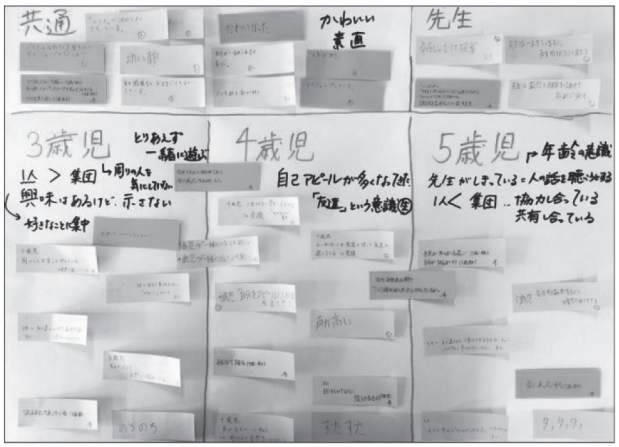
中学生が観察を振り返り、記載した内容について１つ１つ確認しながら、分類した。カテゴリーに分け、表１に示した。共同研究者とともに記述の内容を分類し、分類名ごとに記載してある。
内容について論じる。

観察した内容について、生徒の記述は①幼児の年齢差（3 歳児、4 歳児、5 歳児クラス）による子どもの様子の違いに関するもの、②幼児の能力に関するもの、③中学生である自分たちとは異なる子どもの視点の気づき、④園の先生の幼児への働きかけの特徴、さらに⑤具体的な子どもの姿を取り上げながら幼児の特徴を明確化したことの記載であった。観察内容が多岐にわたることに驚く。同時に観察によって得た内容を授業に効果的に生かしていく、使用していくことの重要性を痛切に感じた。

生徒の記述例にあるように、観察したことによって、中学生が幼児についての理解をさまざまに広げてきたことがよく示されている。

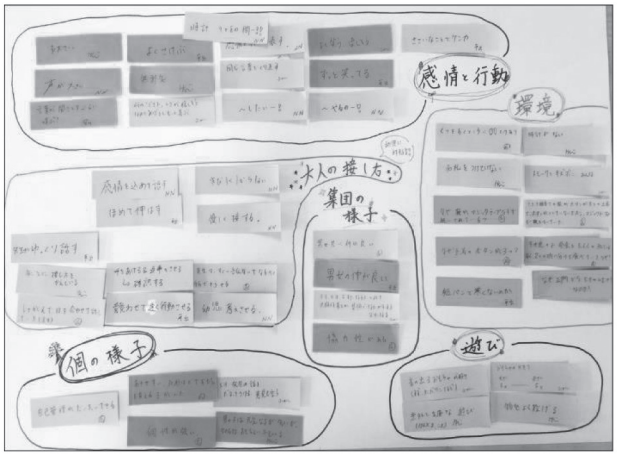
個々人が振り返る内容が異なるだけでなく、グループでの話し合いの内容、観察内での着目のしかたにも違いがあった。以下の２つの付箋紙で作成した観察後のマップは、年齢による違いに着目したグループと多様な角度から子どもの活動を観察したグループとになった。発表してクラスで共有することや、教師による知識の補いが重要になるだろう。

＜付箋紙マップシートの写真①＞



グループでの振り返り：年齢による違いに注目

＜付箋紙マップシートの写真②＞



グループでの振り返り：さまざまな角度から観察

4．考察

中学生は幼児の観察によって何を学んだか。事前授業では、日常に幼児にであうことが少なく、幼児への具体的なイメージがもてないとしていた中学生が、観察によって幼児の中にも年齢による違いがあること、関心をさまざまに表現して示しながら遊んだり、活動する主体的な存在であること、それをこどもに合わせて保育者が働きかけたり、声をかけたりすることは大きな気づきだったようだ。幼児はみな「小さきもの」というイメージだったり「かわいいもの」であることを予想したようだが、成長の中で、さまざまなことばで表現したり、いきいき活動している主体的な存在であることが具体的な活動する姿として理解できたようだ。

何を観察したのかを記述すること、それを用いてグループ内で話し合ったことでの効果は大きい。グループによる話合いの内容の違いはあるので、クラスで共有して発表することで、ともに学びを深めていくことの重要性も示唆された。

観察だけで終わるのではなく、事前と事後の授業を工夫することではじめて生徒の間に知識を広げ、視点を広げ、知識を深めることが共有できる。

グループによる学びを共有する際にも、グループによって違う学びを教師が授業の中でいかに調整したり援助したりするかが重要になってくる。

課題は学びの違い、共有のしかたの違いをどのようにうめ、調整していくか、今後積み重ねながら検討していきたいと考える。

学習課題

幼児の観察をして、
①感じたこと②発見したこと
③疑問に思ったことを
みんなで共有し、
学びを広げよう

写真：個々で観察を振り返り記述をする

写真：グループで話し合い。教員がサポート

最後に「幼児の生活と家族」の学習前に、幼児の観察を行うことの意味について論じる。保育学習、発達について学ぶ準備として主体的な学習になった。

・学習意欲を高めることだけでなく、生徒間での
・経験の差を埋めることが期待できる。

さらに

「幼児」への捉え方について新たな発見や広がりがある。

具体的には

・幼児にも、意思や考えがしっかりとある。
・一人の尊重すべき人である。
・幼児の持っている力（できることたくさんある）
・自分と比較して、体感として捉えることができる。
（幼児の身長、手足の大きさなど）

中学生の椅子の高さと幼児の椅子の高さの違いは、幼稚園で観察してみて実感したものである。

写真：グループごとに発表する

写真：グループで話し合い共有する

幼児の特徴だけでなく、保育者の働きかけ、声掛けについて関心をもち、どんな言葉でかかわっているのか観察していた。先生は、「～しようね」「～するところを見せようよ」といっていた。「目線をあわせて話かけていた」と振り返っていた。ある男子生徒は「今回、幼児を観察して、彼らはなんでも表現しようとすることがわかった。思ったことを素直に短文にしたり、うれしいときにはとびはねたりしていた。」「幼児も自分で考えていた」とした。

今後の課題

本授業は、附属幼稚園と附属中学校内の全面的な理解と協力の上に実施が可能となった。安全をふまえたうえで効果と課題について整理検討し、報告すること、安全をふまえ、よりよい授業の形に改善して生徒の知的発達、心身発達に還元できるよう今後もすすめていきたいと考えている。

【謝辞】

保育中の幼児の観察について許可くださった附属幼稚園園長飯泉健司先生、副園長栗原敏枝先生はじめ幼稚園の皆様と子どもたち、また理解と協力をくださった附属中学校校長道工勇先生、副校長八坂和典先生、関係の皆さまに感謝いたします。

【参考文献】

文部科学省；中学校学習指導要領（2017）

考藤悦子；家庭科保育領域における触れ合い体験学習の意義と課題　岡山大学教師教育開発センター紀要　第6号（2016），113-122

伊藤葉子；中高生の「子どものイメージ」の発達　千葉大学教育学部紀要　53，85-90（2005）

藤後悦子：家庭科教育「保育」研究における動向
家庭科教育学会誌 47（2）（2004）

叶内茜　中学校家庭科のふれあい体験プログラムによる効果の比較　日本家政学会誌 65（2）58-63（2014）

尾城千鶴・吉川はる奈　高等学校「家庭科」における保育体験学習の効果と課題　埼玉大教育学部紀要 59（2）59-67（2010）